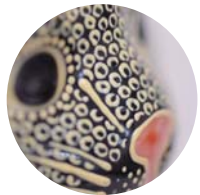


何はともあれ招き猫。

九谷焼の置き物の種類は数多いが、何と言つても招き猫だ。なんとまあ派手な招き猫であることか。通称デコ盛、盛り絵付と呼ばれる独特の技法で極彩色の絵の具が盛り上がるように立体感のある絵付けがされた招き猫は、日本固有の美とされる「侘び寂び」とはまったくもって対極の存在である。



異彩、華麗、九谷焼の置き物。デコ盛の美。



招き猫は全国各地で作られていて、土で作られたもの、高崎のダルマのように紙を張り合わせて作られたもの、最近ではプラスチック製のものも見られる。陶磁器のものでは、瀬戸と有田、そして九谷が主な産地だが、中でも九谷焼の招き猫は独特だ。

ちなみに、写真のように左手(左前脚)を挙げている猫は人(客)を招き、逆の右手(右前脚)を挙げている猫は金運を招くとされている。さらに、色によって

白猫は福招き、黒猫は厄除け、赤猫は病除け、黄猫は縁結び、青猫は安全、緑猫は合格、金猫は満願成就などと縁起が異なるようだ。

招き猫の由来は、中国の唐代の書物、『酉陽雜俎』の中に、「猫が顔を洗い、手が耳を過ぎれば客が来る」との記述があつて、これをもとに誕生したのが招き猫だと言われている。置き物としての招き猫の発祥は、江戸時代。場所は江戸とも京都とも言われて諸説あつて、定かではない。

さて、猫は約1400年前に鼠から仏教法典を守るために法典と一緒に朝鮮半島から渡ってきたと言われている。そして「ネコ」という名前だが、これも諸説あるのだが、興味深いのは、「ネ」+「コマ」=「寝」+「高麗」。つまり朝鮮半島(高句麗、高麗)から連れられてきた良く寝る動物という説だ。狛犬^{コマイヌ}「高麗」+「イヌ」説と相通じるところがあつて面白い。

